元気の継承

●おおい町／水無月祭

若い情熱みなぎる海の祭り

地元の青年たちの熱意が、勇壮な海の祭りを守り続ける。

神輿は推定で3トン。担ぎ手のチームワークと個々の力が要求される（昭和40年代）

祭りが佳境になると神輿を担いだまま海へ（昭和40年代）

毎年7月におおい町本郷地区で繰り広げられる伝統行事『水無月祭』。この祭りは船で人や荷物を運んでいた昔、神に航海の安全を祈念したことに始まった。ご神体を乗せた神輿もろとも、若い男衆が海に入って乱舞する様は勇壮そのもの。地元では「かわそさん」の呼び名で親しまれている。

「祭りに使われている神輿は、大正5年頃に作られたものです」と話すのは、日枝神社宮司の松田悦夫（えつお）さん。当時は神輿づくりに家一軒が買えるほどの財を投じたというから、祭りに懸ける地域の人々の思いがしのばれる。

100年近く受け継がれてきた神輿だが、毎年海水に浸かるため傷みは避けられず、昭和60年代に大修復を敢行。今年も本郷地区の19～29歳で結成された青年義団の手で色の塗り直しなどが行われ、準備が整えられている。義団は神輿の担ぎ手をはじめ、祭りの一切の運営をまかされているのだ。

今年度、団長を務める木村文保（ふみやす）さんは小学5年生のとき、「子ども神輿」で祭りに初参加。「子ども心に祭りの勇姿に憧れていたので、義団に入って神輿を担いだときは嬉しかったですね」と、振り返る。義団に入団することは大人の仲間入りを意味する。祭りが地区の結束を固める役割も担っているのだ。

「かわそさんに懸ける先輩たちの熱い思いに歴史の重みを感じてきました。代々受け継がれてきたものを絶やすわけにはいきません」と語る木村さん。この使命感こそが、これまで祭りを支える原動力となってきた。松田宮司も「かわそさんは、若い人が中心となって進める祭りですから」と団員の活動を温かく見守る。

7月も半ばを過ぎると、「祭りもいよいよ！」と胸が高鳴るという木村さん。若者の情熱に動かされ、今年も神輿が海上を舞う。

勇壮な海上乱舞の後、再上陸する団員たち「水の中では、神輿も軽く感じるんです」

威勢のいいかけ声とともに全力疾走！

準備段階から全員で協力。彼らの手で祭りは引き継がれる

「神輿の修理をしていると、祭りが近いことを実感しますね」と団長の木村さん

information

『水無月祭』

平成18年

7月29（土）・30日（日）

日枝神社

おおい町本郷138-15

TEL.0770-77-0102